

この救いようがない世界で私は生きていく。

IXAハーメルン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

かつて日本に生きていた私

しかし些細なことで死んでふと目が覚めると異世界で子爵家の令嬢に生まれかわっていた

素敵で優雅なお嬢様ライフを過ごしていたというのに、ある日突然実家が（物理的に）大炎上してしまっ……!?

かつて日本で送っていたような貧乏生活へ逆戻りはもう嫌ですわ！
たとえば泥水を啜り木の皮を食んでも元の暮らしに戻ってみま
すわよ……!!

目次

第1話
第2話
第3話

1
6
10

第一話

あれは今から14年……いや、十五年前のことでしたわ。

地球の日本と呼ばれる国で生きていたかつての私は^{ワタクシ}単刀直入に言えば貧乏、日々の食事を食用の野草とパンの耳で生きていく日々を過ごしていました。

野良犬同然、なんとみじめな生活だったのでしよう。今でも泣けてきますわね。

そんなある日のことすわ。

「あれは……500円!」

霞む視界でとらえたのは路上できらりと輝く黄銅の硬貨。

正しく神の導き、ああこれはきつと私を憐れんで施された神からの恩寵に違いない。

「ひゃっほーいー!」

何を食べよう!? やっぱりラーメン!? たしか290円で食べられる店がここに……いやまて、パチンコで無限に増やせばラーメン食べほうだ

「ほげおぎよぎいつ!」

そう、確かこんな感じで車に轢かれて死にましたの。

ええ、ええ、みなまで言わなくとも分かっております。

確かにちよつとばかし間抜けな死に方であったとは自分自身思っておりますし、時々思い出す度顔から火が出る程の周知に死んでしまいうそになつてしまいますわ。

たった五百円ごときで死ぬなんて……

まあそのおかげで今は贅の限りを尽くせると思えば、失敗どころか成功と言つて過言ではありませんわ!

そう、今のわたくしは子爵であるリリィブルーム家の愛娘、リリス・オーレリア・リリィブルームとして異世界で優雅な高貴ライフを過ごしておりますの! おーっほっほっほっほっほッ!ゴホッ!ウゲーッホ!

朝の目覚めは温かな紅茶から。

毎日税の限りを尽くした食事と華やかなお茶会や舞踏会、正に絶頂、人生の勝ち組とはこのことですよわね。

「それにしても寒いですよわね……ちよつとセバス！ この時期に窓開けっぱなしなんて配慮に欠けててよ！ クビですよクビクビ！ さっさと出て行き……」

寒さと頬をチクチク刺激する何かに目が覚めれば、物理的に大きく炎上する（二元）我が家。

放射熱で随分離れていても暖かいですよわ。

「……え、なんで？」

リリース・オーレリア・リレイブルーム、もとただのリリース。

本日よりホームレスになりますわ。

◇

『焼き討ちじやあああああ！』

『悪性を敷く子爵へ死の鉄槌を！』

『燃やせ！ 殺せ！ 奪え！』

「ひええええ……なんですのこの人たち……!? 知性のかけらもありませんわ……！ とんでもねえキチ○イ集団ですよ……！」

ボロボロで妙なおい漂うクツソきったねえ布に身を包み路地裏で縮こまる私、リリース。

その横を一斉に駆け抜けるのは今回の騒ぎを聞きつけ便乗する民衆たち、方向からしてきつと消し炭になった我が家に残るものを奪おうという卑しい考えのもと動いているのでしょうか。

見つかったら殺されますわ……!?

平穏な日々を過ごしていた私でもそれは容易に理解できますの。

（二元）子爵家へ向かう彼らの目はギラギラと欲や殺意に満ち溢れていて、飢える野獣の瞳さながらその前にこの私がこのこと姿を現せば、きつとそのおぞましい衝動のままに嬲られるに違いありません。

「かえちて……につぱんにかえちて……!」

悲しみに喉が震えてろれつが回りませんわ、イヤホンマに異世界恐ろしすぎる。

ちよつと好き勝手に過ごしたただけだというのに、なんと理不尽な事なのでしよう……！

……長い金髪がうつとおしいですわね。

長く美しい髪は貴族のステータス。庶民は決して手入れが行き届かないそれらをぶら下げていれば、私は貴族の関係者と言っているもの。

生き残るためにもどうにかしなければ……おっ？

ふと目に転がり込んできたのは雑に地面へぶっ刺されたナイフ。

柄の木はボロボロで刃は錆びだらけ、お世辞にも上等な逸品とは言えませんが背に腹は代えられませんわ。

髪を捨てるか命を捨てるかの瀬戸際、どなたが捨てたかは知りませんが有り難いことですよ！

「ふぬっ！ ああ、私のいとおしい金髪……さようなら……」

ゴミみたいな切れ味で悪戦苦闘した末、はらりと肩から落ちていく金糸。

最後に残ったのは肩から上で雑に揃えられた髪型、これで隠すのも楽になりましたわね。

最後にすべきは……

「失礼しますわ」

かび臭いですわね……。

次の手として私が訪れたのは一般的に質屋だのと呼ばれる場所。寝巻のまま外に放り出されていたので宝石の類は全くありませんが、それでも寝巻そのものは上等の物。

これと先ほど切った髪を売ってまずは手持ちを増やしますの。

薄暗い店内を進めば骨と皮しか残っていないさそうな老翁がポツリと座り、鋭い眼光でこちらを見つめていましたわ。

目つき悪いですわねこいつ。

「さあこれを買っていただけます？ そうですわね……金貨5枚で

……」

「銀貨5枚」

「は？ 何言ってますの？」

「困ってるんだろお？ 別に買わなくなたっていいんだこっちは」

ニヤリと黄色い乱杭歯を見せつけ下卑た笑み。

こ……この糞ジジイ……！ 完全に足元を見えますわね……！

ぶっこ〇してやろうかしら。

「おっと、くだらないことを考えない方がいいよ」

「な……!?!」

こいつ思考が……!?!

「ここに来る奴は必ずそうやって企み事をするんだ。ただでさえ短い命を縮めたくはないだろう？」

「……わかりましたわ」

覚悟しておけよ……

ホンマにぶち切れそうですわ、ぶちぶちのぶちですわ。

怒りに震える手の上へ雑に投げ渡される銀貨たち。

が、一枚足りない。

「この一枚であんたに服と靴をやろう」

「え……?」

「どうせその頭陀袋の下は裸なんだろう、これを売ったってそんなじゃ逆に目立つからねえ」

「おじいさま……ありがとうございます」

・
・
・

好意(?)で庶民の簡素な布服や木靴を受け取り、小袋に詰まった銀貨を片手に店を出る。

「やっ……」

ピリ……ピリ……

店の横に座り込み頭陀袋をおもむろに細かく裂く。

できるだけ細く、あえて布を解いて端っこをほつれさせることも忘れずに。

あとは目的の物さえあれば……つと。

「ええつと……ありましたわー！」

私が探していたのは石ころ。

それを布屑の上に転がすと……さびたナイフの柄を激しく叩きつける！

幸いにして完全に内部までさびているわけではないようで、木片やじやりじやりとした錆が飛び散ったのちに火花が散り始めました。

かなり大振りのナイフですし野外作業用なのでしょう、しつかりとした作りでよかったですわね。

飛び散った火花はその布切れへ付き、もうもうと煙を上げ始めた。しかしこれで終わりではありませんわ。

さつとその周りを布で包み込むと片手で端を握りしめ、円を描くよう大きく振り回しますと……

「けほ……んん、ふんふんふーん♪ もえろよもえろー♪ あちつ！ちよつとやり過ぎましたわね」

布の隙間から空気を受け火種は燻り、そして大きく燃え上がりだしますの。

ふふ、ガスが止められたときはよく空き地で枯れ木をこうやって燃やして、釣ったボラやトカゲを焼いて食べていたのを思い出しますわね。

こうなればしめたもの。小枝や枯草、千切っては放り込む度炎は歓喜の声を上げ大きく燃え上がり、あつという間に私の身長を越す大火へと早変わり。

おお、カルシフアーよもつと元気になりなさい。

そしてこの家を……燃やしちゃいましょうねー

「おーっほっほー！ この私を馬鹿にした貴方が悪いんですわよー！」

第二話

火が大きく燃え広がった直後のことでしたわ。

有利な立場で私をやりこめ嘲笑っていたであろうジジイが炎に気付き、慌てふためいているであろうことを妄想し高笑いをしていた私。

「おい貴様」

「ぎよえっ!?!」

突然頭上へ走った衝撃、己の意思とは裏腹に崩れる膝。

い、一体何が……頭がクソいてえですわ……!?!

ぬるりと伸びる巨大な影とその半分程度しかない小柄な影。

背後から現れたのは先ほどの糞ジジイとムキムキの髭だるま、達磨の手には一本の太い木材が。

「まさか人様の家で盛大に焚火とは………奴隷商へ売りつけようと追っ手をつけておいて正解じゃったわ」

「あ、貴方この私を奴隷商に……!?! 狂ってますわ! 最低! 屑!

人の皮を被った下種! 悪鬼羅刹畜生道を闊歩する害獣!」

「黙れクソアマあ! 人の家を躊躇いもなく燃やそうとする奴に言われとうないわ!」

「私にはもう失うものなんてありませんの! 好き勝手やって何が悪くて!?!」

くそっ、ここからうまく逃げたらその時は覚悟しておくことですよ。二度と正気で昼間を歩けぬようその身の髓まで絶望を叩きこんで

……

「な、なにかしら……?」

はたと気付いた。

先ほどまで無言であった髭だるまがこちらをじっと見つめ、何か気付いたようにゆっくりと手を伸ばしてきたことに。

ま、まさかこれは……!!

「はっ、まさかこの私で下卑た欲望を発散しようなんて考えている

ので？ 困りますわ、貴方のような存在バナナでも貪っていればぶげっ」

「おらっ！ ちよっとはっ！ 口をっ！ 慎めっ！」

当然の要求を伝えた私の顔へ帰って来たのは無慈悲な拳の返答。

しかも一回ではありません。二度、三度、口を開けばそれをふさぐような連撃。

暴力に頼ろうとするなんてっ、脳みそまで人間からやせいっ!?

やめっ、星がっ!?! ひぬ!?!

・
・
・

「ごべんなさっい……ゆるっちて……」

「どうしやすおじい、この女顔はともかく中身腐り果ててますぜ」

「ふえふえ、どんなものでも使い道はあるという物。丁度邪教徒の要求で見目の整った生贄が必要らしくてな、ちようどいいというものよ」

なにかとても不穏な雰囲気を感じますわ。

木のせいではなければ邪教徒だとか、はたまた生贄だとか聞こえたよ
うな……

「生贄え!?!」

「ああ？ なんだ死にたくないのか」

「誰だって死にたいわけありませんわ!?!」

ま、まずいですわ……!?!

私の輝かんばかりの美貌、男が手を出さないはずがないとは考えて
いましたが、ここでまさかの生贄宣言……!?!

もし手を出されたら甘言でうまく束縛を解き、キ〇〇マをひねりつ
ぶし、もしくは棒を噛みちぎって脱出を図ろうと思っていましたの
に、よりによって生贄!?!

どうあがいてもスプラッタ不可避の残酷描写、この作品開始三話目

にて綿流○編が始まってしまいますの!?

まずい、非常にまずい……私は崇高な夢の道半ば、そげなくだらな
いことで命を尽き果てさせることなど到底出来はしませんの……!

ここは頭を、知略を巡らせ切り抜けねば……!

「な、ななな、なんかおつ、おお、つ、おなかが痛くなってきましたわ
わわっ!」

「そうか、じゃあこの袋の中で存分に……してろつと!」

『~~~~!?!』

暗い! 狭い! 臭い! 一体何が起こってますの!?

「運べ」

「うす」

無慈悲に振り下ろされた頭部への一撃、薄暗い世界が漆黒へ飲み干
されていく艱苦の恐怖が心を締め付ける。

そうして哀れな私は抵抗むなく運ばれていったのです。

◇

「あら……ここは……」

冷たい……寒い……セバス、アーリーモーニングティーはまだです
の……私が寒いといっているのに、まだ……ああ、寒い……

「おらっ! いつまでも寝てんじゃねえ!」

「痛っ! な、ななっ、乙女の寝室へ勝手に!」

「寝ぼけてんじゃねえ! それともぶっ叩かれ過ぎて頭湧いてんのか
!」

目の覚めたそこにはごつごつと硬い岩に囲まれていました。

お父様からもらった大事なペンダントも、民衆から搾り取った血税
で編み上げられた華美なインテリアの数々も、私の大事なものが何一
つとして存在しない、昏く冷たい洞窟の奥底。

そうか、私は……!

「かつ、帰してくださいまし! 私には帰る家が……!」

まあないんですけれど、燃えましましたし。

私の必死の懇願を笑ったその存在は全身を黒いローブに包み込み、

唯一みえる口元をニイと持ち上げました。

カッコつけているところ悪いのですが髭とニキビでキモイですわね、お肌のお手入れは男性でもすべきですわ。

第一黒のローブって、自分から怪しいですよとアピールして他人へ警戒してほしいといっているもの。その上思わせぶりの態度、恥ずかしくないのかしら。

見ているこちらが共感性羞恥で頭がおかしくなつて死にそうですわ。

「おいおい、そんな顔を赤くして……怖いのか？」

恥ずかしいだけですわよ、きも。

「でももう大丈夫だぜ………なんたつてもうじきお前たちは死ぬんだからなア！ 偉大なるラプラス様の生贄となつてよオ！」

ラプラスの悪魔、その名を知るものは多いだろう。

18世紀の数学者ピエール・シモン・ラプラスが提唱した存在であり、ある時点においてすべての物質における『力』と『状態』を認識し全てを解析した上で計算することのできる知能があれば未来を予測できる。

勿論すべては理論上の話であり不可能……悪魔でもなければ。

すなわちその存在を『ラプラスの提唱した存在』、ラプラスの悪魔という。

はたしてこの世界においてラプラスの悪魔とそれが『』でつながるとは言えないものの、悪魔というものは確かに存在していた。

邪教と呼ばれるものは多々あれどその崇拜を向ける存在は多種多様、しかしその中でも悪魔という物は一大勢力を誇っている。

それはやはり悪魔という存在が人間の欲から生まれ、人間をかどわかす性質があるからに他ならない。

件の悪魔『ラプラス』も悪魔として広く知られており、地域によっては悪いことをした子に『ラプラス様が連れ去る』と脅し教育に使われることもあるという。

第3話

「なるほど……『ラプラス』ですの……!」

勝ちましたわ……!

ラプラスと言えば悪魔の中でも最上位の存在、その気質は一般的に残酷と呼ばれる悪魔としては少しばかり変わっていると有名。

第一に人に対して非常に友好的だということ。逸話の中には彼、もしくは彼女と契約を結び莫大な知識を授けられた者もいるという。

第二にかの存在の嗜好。

これもやはり多くの悪魔は血や臓物など即物的で残酷な趣が強い一方で、上位の悪魔になると多少方向性が変わってくる。

精神的な苦しみを重視するようになるのだ。

恐怖、不安、怒り。そういった負の感情と呼ばれるものを何よりも大事にし、獲物を殺すのはその最終的な結果に過ぎない。

つまりどういうことか？

供物として捧げられる時多くの場合は腹を搔つ捌かれ、或いは頭を打ち砕かれ、その存在が手を出すときには既に息絶えていることが多い。

だが相手が上位悪魔であるなら話は別、生きてまま差し出されることになる。

そして何より……悪魔は頭が弱い……!

この邪教徒、声や発言からして品や知性に欠けているのは明白。

このリリス、頭脳の回転には多少の自信がありますの、悪魔を上手く丸め込んで状況を一気に打開して差し上げましょう!

「うう……ぐすつ……お父様、お母さま……」

「くははっ! 苦しめ! 泣け! それこそがラプラス様の最高の糧になるのだからなア!」

己の圧倒的有利とこの先に待つ儀式を妄想し高笑いを上げる邪教徒。

見なくても分かる、その顔は醜く歪んでいる事でしょう。

哀れですわね。

ド低能の庶民と私では知能の水準が異なりますわ。いつてしまえばアワビとナメクジ、同じ巻貝の仲間でも価値は天と地の差であり……最後に勝つのは私。

精々その死の瞬間まで己が詰んでいることに気付かず、私の手のひらで踊ってくださいませ。

勝負とは試合の前から始まっていますの、フッフ。

「時間が来るまでそこでおとなしくしてるんだな！」

「そ、そんな……!?!? どうかここから出してくださいまし！ ねえ！ いやあつ！」

冷たい鉄格子が私の行く手を阻む。

もちろんこれもブラフ、こうやってか弱さをアピールすることで相手の警戒心は大きく緩むのは間違いありませんわ。

それに私ほど見目のいい奴隷をほいほいと買える財力、相手は邪教徒一人とも思えません。私のこの態度をきつと他のメンバーに報告するでしょうし、それで気が緩めばなおさらですわ。

計画を練り上げている最中、突如として後ろから一つの声が飛んできました。

「やめなよ、無駄だから」

は？

◇

「やめなよ、無駄だから」

冷たい牢獄に諦念を含む声が響く。

リリスへ声をかけたのはクレア、年齢15。

その親しみのある優しい性格と穏やかな笑顔、パン屋の看板娘として町内の人々に愛され、すれ違う者で挨拶を返さないものはいないほど……とは表の姿。

その本性は計算高くさながら女狐そのもの。当然その性格も全て張りぼてであり、馴染みやすくかわいらしい女性という立場を存分に利用し、町内カースト制度の中を立ち回っては甘い汁を啜っていた。

突然人さらいにあつて生贄になると分かった時には絶望したけれ

ど、やはり天は私を見捨ててなかったみたいね。

私の後に連れてこられたのは貴族の娘。艶があり緩やかな金髪、血より紅い深紅の瞳、つやつやの爪に豊満な胸は栄養が足りていた証拠……どこを見ても庶民とは離れた世界に生きてきた箱入り娘。

しゃべり、動き、どこを見ても初心であり駆け引きなど経験してきたことのないのかしら。

この箱入り娘を上手く利用しここから逃げつつ、ついでに絶望に落として愉悦も楽しませてもらうわ。

何一つ不自由がなく暮らして来たのでしょね、最期くらい私の役に立って死んでもらおうじゃない。

「私たちはもう……死ぬしかないのよ……」

「そんな……」

あーあーそんなに絶望しちゃって、カワイソ。

でも死ぬのは貴女だけ、私は違うわ。どの人間も絶望の淵に立つほどその思考は狭く、浅くなっていく。

経験の少ない貴族の娘などただでさえ浅い思考は水たまりを超えてもはや陸地、行動は全て予測可能な範囲へと収束していくのよ。

即ち狂乱。

露骨に煽るのではなくこちらにも絶望した雰囲気や言葉を零し続ける。

陸地並みの浅くなった思考へ零された言葉は決して地に吸い込まれることもなく、ただ、ただ溢れるしかない。

確実に、着実に精神を侵食し……

「毎年あるんだ、一人、また一人つて攫われていく。誰も見つからない、誰も助からない。邪教徒はいくら捕まってもどこから湧いてきて、何年かすればまた人が攫われる」

「ひい……」

「ここから連れ出された瞬間が最後、儀式はすぐに始まってしまふのよ。貴女もそうなる、どちらが先かは分からないけどね」

邪教徒が来た瞬間に発狂させる……！

この手の頭が緩い女は声だけは大きい、きっとその精神的な重圧に

耐え切れず発狂して邪教徒の手を煩わせるでしょうね。

そうすればしめたもの、その隙を突きここから逃げ出す。

そうね、上手く逃げられたらあなたを助けるよう救援を呼んであげてもいいわ……。どうせ死んでいるでしょうけどね。

勿論その状況も利用させてもらうわ。貴女は私と牢獄の中で励ましあつた仲、最後まで互いを想い合い……。そして私はそんな存在を諦めざるを得ず後悔に苛まれつつ健気に振舞う美少女として町での地位を盤石のものとする。

あは、なかなか愉快だわ。

そうと決まればまずは最初の一手。